

研究課題 「ヴェトナムハノイ地域における障害者の「自立生活」

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 公共領域 権 藤 眞 由 美 Gondo mayumi

1-1 目的

- ①ハノイルセンターの前身である当事者団体の主張と活動
- ②ハノイルセンターメンバーの主張と当事者運動
- ③介助の側面からみた「自立生活」の現状と成果
⇒明らかにする

1-2 研究方法

2012年6月28日～2012年7月26日
・インタビュー調査及び資料収集

1-3 実施内容

ハノイルセンターメンバーの協力でインタビューを実施し、可能な範囲で答えてもらった。センターの職員には実際に行われている介助サービスのシステムの内容と料金の負担、介助者採用要件など、ピアカウンセリングリーダーの育成、体験室利用→(ILセンター内に設置されている体験室での研修及びその成果)政府の介助サービス制度の設立に関すること、ILセンターへの支援要請、交通アクセスの保障、政府や他の団体との連携や運動などについてインタビューを行った。介助派遣を利用しているメンバーにも同様の項目でインタビューを実施し現在のセンターの動向や「自立生活」の存続に関するメンバーの意識について分析を行った。



筆者 写真左・右上: ハノイルセンター事務所、右下ILセンターメンバー介助派遣利用者と筆者

1-4 成果

滞在期間において、ハノイルセンター及び関係団体の方を対象にハノイルセンターメンバー男性3名、女性4名、コーディネーター2名・ハノイ障害者協会(DPハノイ)1名・障害団体調整委員会NCCD1名・障害者団体BF所属メンバー2名のべ13名に半構造化インタビューを実施した。研究の成果として①センターが存続するにあたって介助者派遣を利用しているメンバーが政府への交渉など、権利主張をするという意識はないに等しい。②政府から介助予算を獲得するには時間を有する③障害者がILセンターの介助派遣を利用し「自立生活」を経験したことで「自立」できるという意識が芽生え、「自立生活」の意義を見出している、以上の三点が調査結果である。

2-1 目的

障害女性における「自立」を妨げる様々な障壁を明らかにすることを目的とする。

2-2 研究方法

2013年2月21日～2013年3月28日
・インタビュー調査及び資料収集

2-3 実施内容

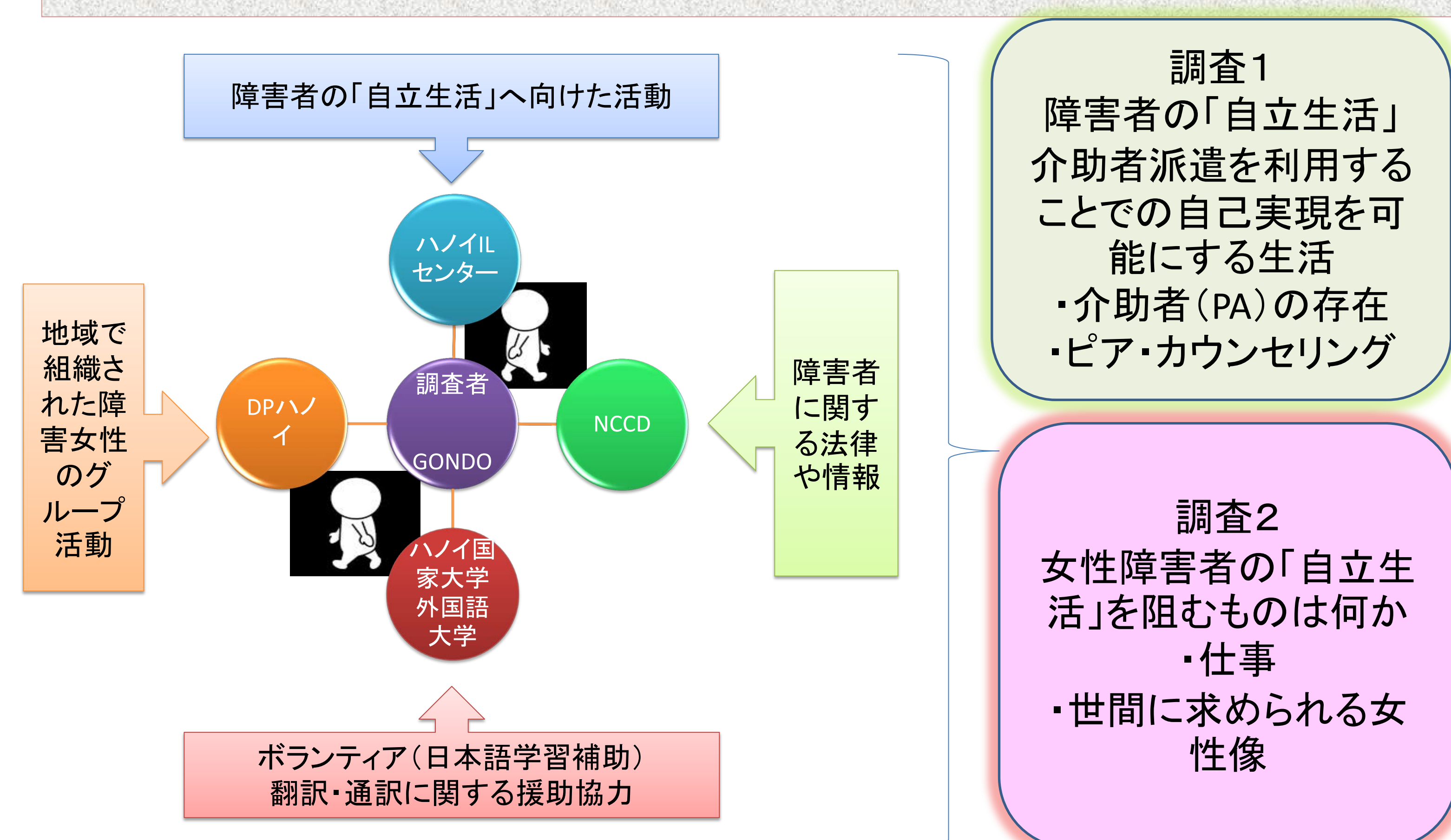
就労、恋愛・結婚・離婚、性と生殖、家事・子育て・家族介助、無理解、教育、制度・慣例、女性としての尊重、経済的な問題などについてなど、障害女性自身が項目を選び、障害女性として障壁を感じたことなどについて話してもらい、「自立」を阻む要因について分析を行った。



写真左: ILセンターメンバーと介助者、写真右: 女性博物館

2-4 成果

ハノイルセンターのメンバー障害女性5名、DPハノイからの紹介で4名に半構造化インタビューを実施した。障害女性であることで、恋愛、結婚についてパートナーとの価値観の相違や家族の反対、子どもを産む、産まないという選択を両親から干渉されたなど、女性であるがゆえの困難をお聞きすることができた。また、前回の調査でお会いできなかったハノイルセンターの前身であるグループの1代目、2代目代表に会い、結成時の経緯についてその当時の話を聞くことができ、次の投稿論文にとって価値あるものとなった。



3 今後の研究計画

2012年度に二度の渡航調査を実施することができ、博士論文作成に向け道筋ができてきた。海外での調査には、時間、お金、そして何よりも人脈をつくることが私には必須であった。現在は、研究調査に向けて論文構成を思案中である。ヴェトナムは、経済成長を何よりも優先させている。これまでの家族構成や地域密着型の人間関係が変容するとすれば、多くの障害者が家族介助に依拠する生活もまた変容すると思われる。障害者自身が目指す「自立生活」を獲得する活動の変遷を今後も継続して研究課題としたい。